

弱法師のアイ

—筑波大学本のこと—

田口和夫

筑波大学附属図書館蔵の『間之本』二冊は「五冊之内」と注記され、五冊組の本であったはずだが、現存する百十二曲だけでも、近世初期の間狂言を推察するによい手がかりを提供してくれている。

この書については、能楽資料集成『能之訓蒙図彙』解説で、表章氏が言及されていて、従来不明だった由来をあきらかにされている。案外見過されやすいので、ここに引用しておく。

末尾に「西村弥三左衛門」と署名があった(所持を示すらしい位置)のを墨筆で抹消してあるが、その西村弥三左衛門の名が狂言之分の「村田平右衛門」の項にその師として見えている。『京羽二重』には「舟橋南通堀川東へ入」として彼の名が掲出されているから、貞享二年十一月には健在だったのが貞享四年四月は故人になつていたものと推測される。間狂言本としては最古の部類に属する筑波大学本

の性質がかなり明確に把握できるようになつたわけで、卒業論文作成に際して同書を利用した経験のある解説者としては、感慨ひとしおのものがあつた。

私も学生のころ、△弱法師▽の演習があつて、とにかく古そうな間の本だから、これを用いて古型が復元できないものかと考えたことがあるが、以下に引用するような内容なので、そのもくろみは失敗したのだった。最近『第十五回篠山春日能解説図録』の「観能小論」に△弱法師▽についての想像説を展開したのだが、そこでは触れられなかったこの間狂言のことから、『間之本』の内容を考えてみたい。(小字で記してあるものは「」でくくり、また句読点を補う)

弱法師卅八(ワキ河内国高安の里に左門尉道俊と云人也、なのつてから)

「ワキ」いかにたれか有 御前に候(ワキ施行ハ今日まさんにて候、念入てふれ候へ)畏て候 皆々承候へ、左衛門尉道

俊殿の施行は今日まさんにて候そ、急て罷出施行をうけ候へ、そのふん意得候へ

〔左衛門尉の子継母にくミ出し、流浪して、わが母の事をなげき、目をなきつふし、乞食する。左衛門尉わか子ハ死ると存、子のためにてうわうしにて、七日の施行をひくなり。左衛門尉わが子とみ付て、夜に入なのり、高安へつれてかへらうすると云て、子のせりふもあり〕

「ワキ」いかにたれか有 御前に候(是成乞食の行衛をわすれ候な)畏て候(かやうにも有)

このアイは、はじめに注記されるように、ワキの名ノリから始まる形のものであり、世阿弥自筆本転写本に見られる古形におけるものではない。はじめの施行の場におけるワキとアイの問答と触れは、例えば日本古典文学全集『謡曲集』(2)にひく大蔵流山本東本とほとんど同じである。その後の小字の書入れは、きちんと空きもあり、セリフに続いて書かれたことが明らかだが、能の内容の説明にもなっていない面白い。即ち、シテを継母が憎んで思い目を泣きつぶすこと、父は子が死んだと思つたことなどである。特に盲目となつた原因は、能の中でも「思ひの涙かき曇り、盲

目とさへなり」と云っているのだから、こういう説明は成り立ち得るのだが、能があからさまには云わぬことを、実に明快に述べているのである。おそらく、江戸初期のこの能の解釈はこういうものだったのであり、観客もこう心得ていたのであろう。この解釈は廢曲△天王寺物狂▽の冒頭でワキが説明する俊徳丸の身の上と共通性があり、自筆転写本から現行的な形への転換には、説経節「しんとく丸」にも近い△天王寺物狂▽的発想が影響を与えているのであろう。

ワキが「高安へつれて帰らうずる」と言ったあとの、「子のせりふもあり」は日想観関係のセリフと考えるべきであろう。当然これをすすめるのはワキであったと考えられる。

最後のワキとアイの問答は現行では見られない。これは古い演出としてよいだろう。四天王寺の雑踏の中で弱法師を見失うかもしれない。そういう気分がこのセリフからは伝わってくる。もともと「かやうにも有」という注記からは、すでにこの演出が用いられなくなりつつあった事が推察されるのである。現行でこれが失われるのは道筋であった。

さて、貞享松井本などの間の本と異なって、能の説明をしながらワキとアイの問答を書くという、この曲の記述のしかたは、間の本としては、かりこまれていないという印象を与

えられる。実は、直接にこの注記とかかわるのであろう本が先行しているのである。

それは寛永十六年（一六三九）大蔵虎清筆の「風流・間伝書」がそれがある。重複する所は多いが、次にこれを引く。

百七 弱法師 津国の能

一 わき河内国高安の里の左衛門尉道俊といふ人なり。左衛門尉女おくれ、我子をまゝは、にかへる。まゝは、其子をにくみ出し、るらうする。其子母の事をなげき、目をなきつふし、こつしきする。さへもんのせうへ我子行衛もしらす出て、死たるとそんし、子の弔ひに津の国天王寺にて、せきやうひく。其庭にて我子と見付、又あいしらいをよひ出し、此こつしきの行衛をわすれ候など申付也

大蔵流の古型を伝えていると考えられる虎清のこれは、セリフを中心として記述されていない。その中でこのワキのセリフをはじめ、曲の説明にいたるまで、筑波大学本のこの曲は、虎清本を直接うけているといってもよい程である。類例としては△俊寛▽もあげられるが、筑波大学本が一般的にこのような記述法をとっているわけではない。虎清の本は奥書にあるように「間之出立脇付事書」だから、別に間の本は存在していたはずである。その面影が筑波大学本の記述からうかが

われると云ってよいのではなからうか。今後検討が必要なことである。

なお△弱法師▽は元禄ごろの復曲と考えられていたが、寛永十六年以前に現行に近い台本で演じられていたことは、引用した両本によって確言できよう。

（文政大学教授・法政大学能楽研究所所員）